
短編 ある魔術師の物語 過去話

桜月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

短編 ある魔術師の物語 過去話

【著者名】

Z2326S

桜月

【あらすじ】

魔術師ゼロが部隊に配属されたとある少女とのお話を

(前書き)

今回は作風(?)を変え恋愛短編風に書いてみました。

やつ、本編にちゅうじと名前が出たあの子の話です。
興味のある方はぜひじー読下せこま(ーー)ま

「いつまで休んでるのよ。

あなたは犬とか猫とか、いえ、それは犬や猫に失礼ね。彼らは彼らのルールでしつかりやっているのでしょうか？ではゼロ？あなたは人ではない何かなのかしら？それとも家畜とか？働くもの食べるべからずとか言うわよね？」

「…………」

「無言、俺はただただ無言。

俺がこの「黒い月」に入った時に、このサイズという少女とタッグ（サイズは仕事選定人だ。）を組む事になった。

実際、彼女は見た目金髪碧眼の可愛らしい容姿をしていた。妹や娘をと接する感じで（記憶喪失の為なんとなくの感じ）接しようとしたのだが、最初の挨拶は

「仕事の時にはこちらから話かけるから、話しかけないでよ。なにその態度腹がたつわ」

だつた…

あれから約一年、仕事もそこそこなし、頑張ってきた。

その間にも、仕事仲間として（決して他意はない）サイズとは円満な仲を築きたかったから話しかけ続けた。

そのたびに罵詈雑言を貰つたもののめげずに頑張り（一応言つとくが俺にそつちの趣味はない）。

「……一年で気づいた性癖はどちらかと言えば苛める方が樂しい…」
暫くして、（正確には一時期、仲良くするのを諦めて話しかけない
よつこしよつとしからは）サイズから話しかけてくれるよつこも
なつた。

あつと俺の熱意が届いたのだと思つ。

…会話内容はやつぱり罵詈雑言だつたが、
話しかけてこないで

とまで言つていた相手が話かけてくれたのはとても嬉しかつた。
俺に居たのかは分からないうが、なんとなく家族、友達、悪友、そん
な感じの存在が出来たのだと思えたから。

…ただ会話内容をもう少しだけ柔らかくしたい。心からそつ思つ

んで、冒頭の長たらしい台詞を無表情で一息に言つたけたはやつ
ぱりサイズで、理由は依頼達成の報告をしたあと、大事な書類を纏
めずりに寝てしまつていていたからだつた。

「どうするの？ゼロがやらなかつた書類が提出されないばかりに大
勢の人が貧困に喘いでいるのよ？」

つづりよつとまで

「まてまてサイズ。俺にそんな重要書類回つてくるわけ無いだろつ
？あの書類は確か新しい魔術のアレンジの仕方を考えたから見てみ
てくれつてやつだつたよつな気が」

「黙りなさいな」

…蹴された。

「ていうか呼吸音が五月蠅い。なんとかならない？」

「俺に死ねとこりのカ！」

キツい！最近なんかキツい！

何で！？最近なんだか機嫌悪そつだつけど、俺は話かけなかつたのに！

「まあいいわ。ゼロが無能なのは分かつてたから」

「『リラリラ』、俺だつて頑張つて完徹で依頼をこなしたんだぞ？」「

流石に鳴きそうになる。

部隊長や仲間内は入隊一年の若輩者の俺の成長を誉めてくれたりしてくれるが、タッグを組んでいるパートナーに此処まで言われると…

言われると…？

「あら、どうして黙るのかしら？今更ながら自分の無能にこづけられたのかしらね？」

「なあ、サイズ」

俺は

「なにかしら？」

とつておきの

「今日や」

復讐を

「だからなに？」

思いついた。

「料理を奢るから、残つてゐる書類の作成を手伝つてくれないかな？」

…結論から言つて、俺の復讐は成功した。

断られる気がした俺の個室への招待はなぜかあつさりオーケー
俺の書斎で書類の作成の手伝いもしてくれた。

…門題の料理。

そつ、そこだとある悲劇が生まれた。

俺は普段散々ぱら言われている復讐^レにと大量のしかし体に害が無い
くらいにある物を混ぜた。

それは……タバスコだ！

それに追加で以前から嫌いだと言つていたピーマンも混ぜてやつた。

サイズは見かけ少女である。

だが、実年齢は17才だと、半年前、入隊直後よりかは、よく話す
ようになつてから教えてくれた。

今でも正直、13才か14才くらいにしか見えないが。
かといって、別にサイズは病気でもなんでもないらしい。

故にサイズの身体的コンプレックスに至つた原因は俺はこう踏んだ。

食わず嫌い

俺はそれを矯正してやつ、などと適当な理由を付けて自分を正当化し、オムライスにピーマンをまぜ、ライスにケチャップと共にタバスコを投下し、大きめのスプーンと共に出した。

勿論、俺のは普通のオムライスを作った。

その結果、サイズが泣いた。

もう子供のように。あの無表情のサイズがむせび泣いた。

「サッサイズ？！」

正直言おう。俺も泣きたい。

予想外過ぎた。

サイズがあの大きめのスプーンに多めにオムライスを乗つけて、そのあとオムライス半分くらいを一気に、子供みたいに口にかきこんだんだから。

まあ、そんなことすりゃ無事じやすまないよな。

「ウッ、グス。ひ、どいよゼロ。本当は楽し、みにしてた、のに、こんな、こんな」

もう途切れ途切れに訴えてくる。加虐心が、本当に少しだけ湧いたが、この状態でそんな人として間違つたことは言つてられない。これから俺がやるべき事はただ一つだった。
ふう、と一つ氣合いを入れて…

サイズが半分食べたあのタバスコオムライスを俺は一気に喰らつた。食らいつくし、俺の方のタバスコ無しのオムライスをサイズに渡した。

「ゼッゼロ？！」

だが今は喋れない。俺は無言で立ち上がり、キッチンへ向かった。

勿論、用意しておいたのさ。

まさか泣くとは思わなかつたけれど、せりんとした料理。

それと…

「サイス、これ。」

舌が痺つつ痛いという訳の分からぬ状態で上手く喋れない為、多少素つ氣くなつてしまつたが

「…！」

サイスの鉄面皮が剥がれた。

泣き顔じゃない、吃驚した顔で。

「これ、ケーキ。誕生日つて…」

「ああ、まあな。」

舌が未だしひれでいるがなんとか話す。

「部隊長こそ、聞いてたんだよ。サイスの誕生日、そしたら今日だつたからさ。速攻で作つてみた。味は期待するなよ。ケーキ作んのなんて初めてだからな」

一気にまくし立てて俺はそっぽ向いた。

そつ、今日は相棒、サイスの誕生日。
でも思い出したのは本当にしつづきの事。

部隊長や仲間内では俺の成長を讃めてくれるのに、みたいな所で連動で思い出した。

勿論当日に思い出せばサイスへのプレゼントなんてあるわけが無い。それ故にタバスコオムライスで復讐の意味も込めた、サプライズをしてから誕生日おめでとさん、てのが俺の筋書きだったんだが。最初はマジで焦った。

「じゃあ、さつきの……」

サイスもよつやく完全に涙を引っこめてこちらを向いた。

「ん…まあ本当は普段の復讐も多少入ってたんだけどな。サイスが泣いたんで計画を変更した」

「…」

なんか、黙つた。

…怖い！

「あ」

「あ？」

すると彼女は…

「あ、ありがと…」

と、頭を下げた。言ことへて、泣く声が止まらなかったよー格好悪つー。

「あ、ああ。その、お、おめでと…」

つられて俺もどもつちまつたよー格好悪つー。

でも、ま。いいか。

俺はしつかり見たんだからな、サイズ

お前がありがとう、って言つたとき、いつも無表情じゃなく、微かに笑つたのをさ。

……物語的にはここで終わればまだ綺麗に纏まつたのかもしないけどなー

この後サイズの誕生日を祝おうと探して回っていた部隊長や仲間達、変態考古学者が部屋に突入してきて部屋が半壊したり、魔術戦になつたりしたんだけど…

ま、それを語るのはまたいつかって事で。

魔術師ゼロの日記より抜粋

204/10/36

(後書き)

いいよで読んで下せりありがとうございました！
次は本編の次回でお会いいたしましょう！（ ）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2326s/>

短編 ある魔術師の物語 過去話

2011年10月8日23時28分発行